

# 研修医へ効果的な地域保健・医療研修を提供するための質的研究

マツオカ ヒロアキ ナカセ カツミ ハツサカ ヨウジ  
 松岡 宏明\* 中瀬 克己\* 發坂 耕治<sup>2\*</sup>  
 カネコ ノリヨ ヨコヤマ ヨシエ  
 金子 典代<sup>3\*</sup> 横山 美江<sup>4\*</sup>

**目的** 平成16年度から新医師臨床研修制度において「地域保健・医療」が必須項目に位置づけられ、「地域保健・医療」研修が臨床研修の1つとなった。本研究では、研修医が研修実施前に、「地域保健・医療」研修においてどのような知識や技術を身につけたいか、どのような形式の研修を望んでいるのかを質的調査により検討した。

**方法** 臨床研修指定病院において1年目の研修中である3人の研修医に個別インタビューを実施し、その後7人および6人からなるグループ合計2グループに対し、グループインタビューを行った。

**結果** 本研究の対象者においては、大学教育の後であっても保健所業務、ひいては保健サービスに関する具体的なイメージを持ち得ていなかった。研修先選定の際には「地域保健・医療」のプログラム内容は考慮されておらず、「地域保健・医療」研修の目標についても意識されていなかった。研修医の地域保健研修への期待では、保健所の仕事や保健所で働く専門職について知りたい、とくに臨床実践に関わる公衆衛生分野を知りたいとの意見があった。臨床に関わりの深い領域として、具体的には、結核・感染症の届出や難病・介護保険にまつわる、公的保健サービスの実際の知識と技術が挙げられた。さらに研修方法としては、地域住民に対して健康教育プログラムを自主的に計画・実施するといった参加型の研修形態を希望する者もいた。研修期間については、1週間以上1か月未満という意見が大勢を占めた。

**結論** 保健所における「地域保健・医療」研修に対して研修医は具体的な業務イメージを持っていなかった。研修内容に関する研修医の具体的な希望は、臨床業務に関連した保健事業の研修であった。こうした研修医に地域保健および公衆衛生的な知識・技能の習得を図るためには、臨床実践から保健事業へと展開していく研修方略の開発が必要である。

**Key words** : 研修医, 地域保健・医療研修, 質的研究

## 1 緒 言

平成16年度から新医師臨床研修制度において「地域保健・医療」が必須項目に位置づけられ<sup>1)</sup>、「地域保健・医療」研修が重要な臨床研修の1つとなった。地域保健研修の一翼を担う保健所における地域保健研修の研修目標は「医師として、地域の住民の健康の保持及び増進に全人的に対応す

るために、ヘルスプロモーションを基盤とした地域保健、健康増進、プライマリーヘルスケア、リハビリテーション、福祉サービスに至る連続した包括的保健医療を理解し実践できる能力を身につける<sup>2)</sup>ことであり、今後多くの臨床医が公衆衛生的見識と技術を備えることへ向けて、大きな期待が寄せられている。

しかし、研修医を対象とした地域保健・医療研修は、これまで全国の保健所にとって研修実績がなかった。このような状況下での研修成果を高めるために、日本公衆衛生学会や保健医療科学院、全国保健所長会では数次のワークショップを実施して研修の行動目標を提示し、また保健所職員の研修指導技能の向上を図ってきている<sup>3)</sup>。この

\* 岡山市保健所

<sup>2\*</sup> 岡山保健所

<sup>3\*</sup> 名古屋市立大学看護学研究科

<sup>4\*</sup> 岡山大学医学部保健学科

連絡先：〒700-8546 岡山市鹿田町 1-1-1

岡山市保健所 松岡宏明

ワークショップでは教育目標の設定を出発点とするプログラム開発が採用され、その成果として、教育目標や方略が公表されている<sup>4)</sup>。

こうして開発された研修プログラムが研修医の医師としての知識及び技能、態度の向上に結びつく効果的な研修となるためには、研修プログラムが研修医のニーズに合致したものであることが必要である。地域保健研修以外の臨床研修や広く医学教育一般に、学習者側の学習への意欲や準備状態に見合った教育でなければ研修成果は期待できない<sup>5)</sup>。とくに、研修医の多くは臨床医を志望しており<sup>6)</sup>、研修医側の地域保健に対する研修意欲が乏しい可能性がある。そうした状況では、研修医側のニーズを踏まえたプログラムを検討する必要があるといっそう高まる。

しかし、こうした研修医側の地域保健研修への意欲や準備状態については僅かに河上らの報告<sup>7)</sup>があるのみである。そこで、本研究の目的は、個別およびグループインタビューを通して、臨床研修中の研修医が「地域保健・医療」研修を開始する前の段階で、地域保健研修にどのような知識や技術の習得を望んでいるか、また、どのような形式の研修を望んでいるのかを明らかにすることである。

## II 方 法

### 1. 対象者

○ 県内の3人の研修医に個別インタビューを平成16年7月に実施し、その後7人および6人からなるグループ合計2グループに対し、グループインタビューを9月から10月に行った。対象者は、○ 県内の臨床研修指定病院（いずれも基幹型病院である大学病院とそれ以外の2つの総合病院）において1年目の研修中で、かつ「地域保健・医療」研修を受講前の研修医である。これらの対象者は、各臨床研修指定病院の研修担当医師に研究の概要を説明し、研修医の紹介を依頼することにより紹介された者であり、本研究の主旨説明に同意が得られた者である。対象者の性別は、男性が8人、女性が8人であった。研修医の初期研修終了後の進路希望はインタビュー実施時点で、地域医療（自治医大卒業生）1人、内科2人、外科3人、産婦人科3人、小児科1人、精神科1人、整形外科2人、形成外科1人、未定2人であり、地

域保健や公衆衛生行政を希望する研修医はいなかった。

### 2. インタビュー方法

個別インタビューには、半構造的面接法を用い（資料1）、3病院から1人ずつ各1時間実施した。グループインタビューには、フォーカス・グループ・ディスカッションを実施し<sup>8,9)</sup>、2グループともそれぞれ1時間半かけて行った。インタビューは、筆者の内、保健所に勤務する医師3人のうち1人が担当した。また、対象者から承諾を得た上で、言語的および非言語的コミュニケーション内容を筆記、ICレコーダーで記録した。インタビュー項目は、保健所に対して持っていた印象、大学時代の公衆衛生に関する講義や実習の内容、「地域保健・医療」研修への期待と要望、研修病院・プログラムを選定した際の「地域保健・医療」の重要性であった。

グループインタビューは、資料2に示すインタビューガイドに沿って、対象者に質問を行った。各インタビューの導入に引き続き、現時点での公衆衛生に対する印象を尋ね、大学時代の「地域保健・医療」に関する教育・経験やそこから得た内容、研修プログラム選定時においてどの程度「地

#### 資料1 半構造的面接法における質問項目

1. 現在の研修生病院での配偶、出身大学、現時点での専攻志向など基礎項目
2. 学部時代の公衆衛生学、衛生学関連の講義、実習、経験
3. 現時点での下記地域保健、公衆衛生の課題に関する関心、健康教育、地区組織活動、ヘルスプロモーション、健康日本21、精神保健、感染症、EBM、食品衛生、衛生管理
4. 保健所との過去のかかわりと、現在持っている印象
5. 地域医療研修へのニーズ、研修プログラム選定時の地域医療研修への関心
  - 地域医療研修のときに学びたいこと（他の研修チームメンバーからの意見も）
  - 保健所業務で関心のあること
  - 地域医療の項目の中でも特に保健所での実習でまなびたいこと
  - その他身に付けたい視点
  - 今もっている疑問
  - 希望研修プログラムを決めるときにカリキュラム参考にしたか

域保健・医療」研修内容を重視したか、また現在持つ「地域保健・医療」研修への期待と要望という順で尋ねた。インタビューの実施場所は、個別インタビューは研修病院の面談室、グループインタビューは大学の演習室であった。

### 3. 分析方法

半構造的面接法、フォーカス・グループ・ディスカッションにより収集したデータは、KJ法<sup>10)</sup>に基づいて分析した。テープに録音されたインタビュー内容から逐語録を作成し、逐語録の中で研究目的と関連すると考えられる部分を抜き出してラベルを作成した。ラベル内容が近いもの同士を集めてグループ編成を繰り返し、さらに表札を作成、図解化した。グループ編成および図解化は保健所に所属する医師1人と岡山大学医学部保健学

科教員1人がそれぞれ独立に10時間をかけて実施した。この二つのグループ編成および図解化の結果について、保健所に所属する医師3人ならびに岡山大学医学部保健学科教員2人の計5人が全体にわたって合意を得るまで約3時間の検討を2回実施した。

## III 結 果

### 1) 「地域保健・医療」や保健所への印象

図1に示すごとく、保健所の仕事内容として、感染症、食中毒対策、犬猫の引取りが最初に挙げられた。また、大学時代に保健所の見学を経験したことのある研修医もいたが、保健所の仕事について「まったくイメージがない」、「どのような人が働いているのかイメージがつかない」、「仕事に動

### 資料2 臨床研修医 グループインタビューガイド

#### 1. インフォームドコンセント

研究目的および概要について対象者に説明し、インフォームドコンセントを行う。特に氏名は聞かないこと、発言内容により対象者に不利益が生じないこと、個人が特定されるような形で公表することはないことを説明。

#### 2. グループインタビューシナリオ

##### 1) 導入

- (1) あいさつ、インタビュアーの紹介
- (2) インタビューの目的と内容
- (3) 今後の研究成果の活用について
- (4) グループインタビュー法の説明  
(対象者の意見を科学的に分析し最大限に生かすことについて説明)
- (5) 録音の承諾を受ける
- (6) 時間の説明

##### 2) 質問項目

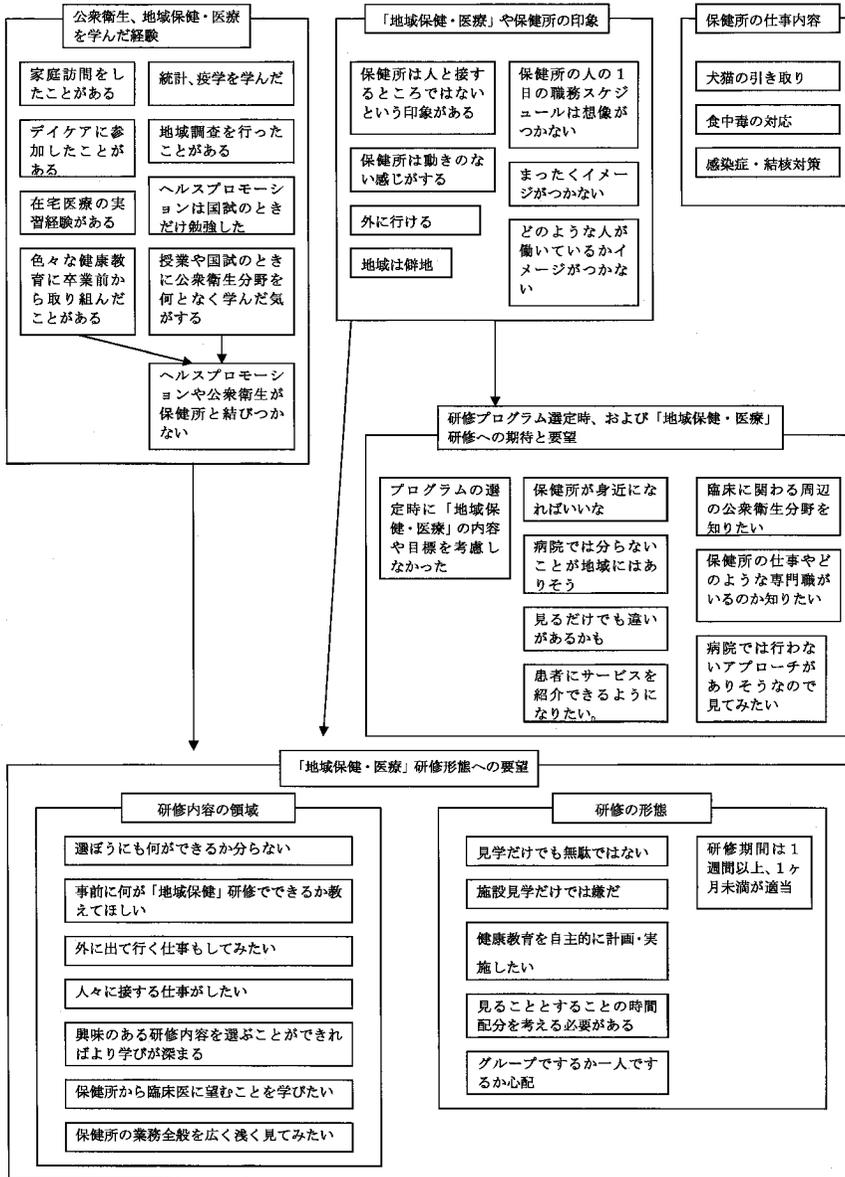
- (1) 地域保健・医療・保健所の印象
- (2) 公衆衛生、地域保健・医療を学んだ経験（講義や実習の有無、印象、内容）
- (3) 現在の研修プログラムでの臨床経験と将来の進路志向
- (4) 「地域保健・医療」研修への期待と要望
- (5) 現在の疑問

##### 3) 本日のインタビューのまとめとお礼

#### 3. 司会者の留意点

- 1) メンバーが話しやすくなる環境を作る（緊張や遠慮を必要としないようにする）
- 2) メンバーが話したくなる環境を作る（意見を述べることを積極的に compliment する）
- 3) メンバー間のグループダイナミクスを促進する
- 4) グループインタビューのテーマに沿って進行するよう道案内をする
- 5) 参加メンバー全ての意向が反映されるよう、必要に応じて発言の流れを調整する
- 6) メンバーの意見をより深める
- 7) グループ内の意見に対する同意または反対をチェックする
- 8) メンバーの非言語的な動きを察知し、積極的に発言できるよう道案内する
- 9) テーマに関するメンバーの発言を要約する
- 10) 最後にメンバーのテーマへの貢献の意義を明らかにし、メンバーが満足感を得られるようにする

図1 研修医に対するインタビュー内容の図解化



きがない感じ」,「保健所の人の1日の職務スケジュールは想像がつかない」といった発言にみられるように,なんらの明確な印象を持っていなかった。

2) 大学時代の公衆衛生, 地域保健・医療を学んだ経験

大学時代に公衆衛生で学んだ内容としてあがったのは,疫学や統計であり,これらの学習印象が強いことが伺えた。また,家庭訪問,地域調査な

らびに地域での健康教育まで行った経験を語る者もあり,出身大学によっては,実地経験や参加型の,工夫された実習や演習を経験している者もいた。そうした工夫された経験も,地域保健ひいては保健所業務に関連する内容であることを認識していなかった。また,公衆衛生関連の講義に関する印象は薄く,学んだ内容と具体的な地域保健,健康づくりに関連する保健事業とを関連付けた発言はみられなかった。公衆衛生分野に関しては,

「国家試験の勉強や授業を通してなんとなく一通りを学んだ気がする」との研修医の発言に、他の研修医も同意していた(図1)。

### 3) 研修プログラム選定時、および「地域保健・医療」研修への期待と要望

研修病院ならびにプログラムを選定する際に、「地域保健・医療」の内容や教育目標を考慮したとの発言は聞かれなかった。

「地域保健・医療」研修に関しては、「病院では分からないことが地域ではありそう」、「病院では行わない対象者へのアプローチがありそうなので見てみたい」、「保健所はどのような仕事をしているのか、どのような専門職がいるのかを知りたい」、「臨床に関わる周辺の公衆衛生分野を知りたい」といった期待が聞かれた。とくに臨床に関わりのある公衆衛生分野として、感染症や難病、介護保険制度などの分野があがった。そして、研修の到達目標として、「保健所でのサービスや難病、介護保険等の制度を患者に説明できるようになりたい」、「保健所がより身近になったらいい」との意見があった。

### 4) 「地域保健・医療」研修形態への要望

研修の形態としては、「座っての作業や施設見学だけはいや」、「健康教育など自主的に計画・実施したい」というように、主体的に取り組みたいと要望する者もいた。特に保健所業務を机上での事務作業ととらえていた研修医は、「人と接する仕事をしたい」、「外へ出たい」という希望を述べた。

また「保健所の業務全般を広く浅く見てみたい」という意見がある一方で、「自分の興味のある研修内容を選ぶことができればより研修しやすく学びが深まる」との意見もあった。しかし、何かを選ぼうとしても、「何が出来るのかが想像できない」とのべ、「まず事前に何が地域保健研修でできるのか教えて欲しい」という意見があった。また「保健所の人に臨床の医師に何を学んで欲しいと思うのかを示して欲しい。それがあれば明確に何がしたいというのが出てくる」との意見があった。

また、研修期間については、1週間以上1か月未満との発言があり、1週間未満や1か月を超える研修への希望はなかった。

## IV 考 察

本研究の対象者においては、大学教育の後であっても保健所業務の具体的なイメージを有する者はほぼ皆無であった。臨床医学における対人サービスや臨床技術と対比して、保健サービスや公衆衛生対策に関しては、具体的なイメージはおろか、概念的な理解も乏しかった。一部の大学では、公衆衛生行政の現場に触れる経験を持つ者もいたにもかかわらず、その実習経験が保健サービスや保健所業務と関連付けて理解されてはいない場合もあった。研修先選択の際には「地域保健・医療」のプログラム内容は考慮されておらず、「地域保健・医療」研修開始を目前に控えても、その目標すら意識されてはいなかった。このように研修医の地域保健研修への準備状態の低い状況への配慮がなければ、効果的な研修は期待しがたい。

研修医の地域保健研修で学びたいことは、「保健所の仕事や保健所で働く専門職について知りたい」ということであった。しかし、公衆衛生的概念や保健所の具体的な業務内容を知らないため、具体的な要望という表現にはならなかった。内容や研修分野に関して、かろうじて具体的なニーズとして表明されたのは臨床実践に関わる公衆衛生分野を知りたいとの意見であった。そのなかでも、感染症対策や難病対策、介護保険に代表される臨床業務に関わりの深い公的保健サービスの実際を学びたいという希望が表明されていた。この希望を出発点とする地域保健研修プログラムの開発が必要である。卒前公衆衛生学教育でも、ケースメソッドや家庭医学実務への参与観察から公衆衛生学全般の教育へと展開する方法が提唱され、成果を挙げている<sup>11)</sup>。臨床研修では卒前教育より以上に臨床実践からの展開をより充実できよう。研修形態としても地域住民への健康教育の計画および実施に取り組みたいという積極的な希望もあったこととあわせて、机上演習やグループワークに留まらない、実務を取り入れたプログラムを開発するべきであろう。

また、研修医からは「何を学んで欲しいかを保健所側から示してもらいたい」という希望があった。これは、研修医の保健所実務への知識や、公衆衛生概念の知識習得が不十分であることに留ま

らず、「public health mind を持った臨床医」というロールモデルが研修医には存在していない可能性を示していよう。そうした臨床側でのロールモデルを具体的に示せる教育ツールの開発が望まれる。

一方、ヘルスプロモーションや健康危機管理、地域診断、さらに行政的対応、事業評価という保健所業務固有の知識や技術への関心についてはわずかに一人の研修医が積極的に言及したに留まった。こうした公衆衛生概念の卒前教育への導入が図られてきているとはいえ<sup>12)</sup>、概念的理解も得られていない状況での臨床研修は効果を期待しがたい。まずは関心の高い研修医へ提供できるプログラムを開発し、ついで、研修医一般に受け入れられるか否かを検討すべきであろう。

一方、研修期間については、1週間以上1か月未満との希望であった。しかし、上述のような臨床実践関連の事例や家庭医学実務から出発して公衆衛生サービスへと展開するプログラムを開発する場合には、週一回数か月関与という研修の形態も検討すべきであろう。

本研究は平成16年度地域保健総合推進事業・新医師臨床研修「地域保健・医療」の実践的な研修方略に関する研究（事業者伊藤善信）の一環として実施した。

（受付 2005.10.31）  
（採用 2006. 8.21）

## 文 献

- 1) 厚生統計協会. 国民衛生の動向. 東京: 厚生統計協会, 2003.
- 2) 一色 学. 平成15年度地域保健総合推進事業 新医師臨床研修「地域保健・医療」の効果的な研修の在り方に関する研究報告書. 2004.
- 3) 伊藤善信. 平成16年度地域保健総合推進事業 新医師臨床研修「地域保健・医療」の効果的な研修の在り方に関する研究報告書. 2005.
- 4) 新医師臨床研修「地域保健・医療」の効果的な研修の在り方に関する研究班. 保健所研修ノート. 2004.
- 5) 大西弘高. 実例から見る卒後臨床研修 プログラム開発の方法論から実践まで. 東京: 篠原出版社, 2003.
- 6) 森美穂子, 堤 明純, 石竹達也. 社会医学系課題に対する医学生の興味. 医学教育 2003; 34(1): 57-60.
- 7) 河上靖登. 平成16年度地域保健総合推進事業「研修医から見た新医師臨床研修制度（地域保健分野）の在り方に関する研究」報告書. 2005.
- 8) 當山紀子, 渡邊雅行, 中村安秀. フォーカス・グループディスカッションによるニーズ把握の技法. 保健婦雑誌 2001; 57: 602-608.
- 9) 安梅勅江. ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法. 東京: 医歯薬出版株式会社, 2001.
- 10) 川喜田二郎. KJ法の展開と応用. 続・発想法. 東京: 中央公論新社, 1970.
- 11) 山根洋右, 塩飽邦憲, 北島桂子, 他. 公衆衛生学におけるコミュニティ基盤教育の展開. 医学教育 2003; 34: 89-95.
- 12) 山根洋右, 塩飽邦憲, 北島桂子, 他. 「新しい公衆衛生」におけるコア概念と地域基盤公衆衛生学教育の意義. 医学教育 2004; 35: 47-52.